

編集委員長任期終了にあたって

オカザキ 岡崎
イサオ 勲*

I はじめに

私が、平成12（2000）年1月1日から平成17（2005）年12月31日までの2期に亘り、日本公衆衛生学会機関誌「日本公衆衛生雑誌」の編集委員長として6年間大過なく勤めることができたのは、編集委員の先生方および事務局を含め学会関係者各位の御支援、御教示、御協力によるものであり、心から御礼申しあげる。中でも、編集担当理事 嶋本 喬教授（2001年）、三浦宣彦教授（2001、2002年）、小林廉毅教授、金川克子教授、伊達ちぐさ教授、副編集委員長 豊嶋英明教授（前期）および吉田勝美教授（後期）のご支援に感謝申しあげる。ここに過去6年間編集に携わった報告と所感を述べ、本誌の発展に資したい。また平成15年の日本公衆衛生雑誌創刊50年記念事業および平成16年11月号創刊の英文号について報告する。

II 投稿論文数の推移

過去6年間の投稿論文数は毎年おおよそ130～150編であった。そのうち毎年100編ほどが原著を希望して投稿されている。投稿論文全体での採択率は以下のとおりである。平成12年度（12年4月～13年3月）では、前年度から繰り越された審査継続中論文が82編、平成12年度に新規投稿された論文が162編の合計244編が編集委員会で検討され、採択は84編（34%）、審査継続が105編（43%）であった。同様に、平成16年度（16年4月～17年3月）では、前年度からの審査継続論文83編、新規投稿論文131編（英文投稿論文16編を含む）の合計214編が編集委員会で検討され、採用は71編（33%）、審査継続が102

編（48%）であり、年度別採択率にほとんど変わりはない。

興味深い、魅力ある論文はもとより、ほとんどの投稿論文を編集委員の先生方は好意的に採用の方向で検討された。査読委員の先生方は、多くの時間を割いて専門的立場から詳細に検討下さった。重ねてその労苦に対し関係各位に心から謝意を表したい。

それぞれの投稿論文で問題点が異なるので一概にはいえないが、原著論文について注意すべきことを述べる。第一に、論文題名、研究目的、研究方法、結果、考案、結論に一貫性が必要である。第二に、研究を始める前に十分に指導者や同僚らと討議してほしい。何を明らかにすればどれだけ社会に貢献できるかなど、大きな視点から研究の目的を明確にしてほしい。第三に、目的に沿ってどのような仮説が立てられるかなど、これらできれば様々な観点から討議して作成してもらいたい。そして仮説を立証するには、どういう研究方法を使ったらよいかを十分に練ってほしい。すでに実証されたことや先行研究からの証拠と、投稿論文による新しい知見とを併せて考察すること、単なる著者の根拠を欠く推測を上記の考察と峻別することを常に念頭においてほしい。自分たちの研究でいえること、推測にしか過ぎないことを明確にして結論の表現を書く訓練が必須と考えられる。最も悩まされたのは、行政の資料・報告書として発表したものを、分析や推敲などを加えずに投稿してきた場合である。いいかえれば、データが先にあり、研究目的が多岐にわたり、仮説はなく、研究として方法論または結果の内容に new findings がない場合である。資料として貴重な時は、資料として書き直していただいた場合も少なくない。倫理的問題については後述する。

* 東海大学医学部基盤診療学系公衆衛生・社会医学
連絡先：〒259-1193 神奈川県伊勢原市望星台
東海大学医学部基盤診療学系公衆衛生・社会医学

III 採用論文の内容の変遷

日本公衆衛生雑誌創刊50年記念事業の一環として、第50巻3号において、第1巻から第49巻までの掲載論文の変遷について報告した。それ以後について、最近新たに資料を更新し、インターネット (<http://www.jsph.jp>) でアクセスできるようにした。ここでは過去6年間に絞って論文内容の変遷を述べる。

過去6年間に掲載された論文の種類、分野などは上述のインターネットで詳細なデータが掲載されているので参照されたい。平成12(2000)年1月(第47巻1号)から平成17(2005)年12月(第

52巻12号)までに、論壇22編、総説19編、原著245編、短報12編、公衆衛生活動報告44編、資料162編、会員の声13編が掲載された(表1)。この過去6年間の掲載論文を領域別にみると、図1のように「地域保健・福祉」の領域の論文が多い。ここにいう「地域保健・福祉」の領域とは、インターネットでも掲載しているように、健康教育・ヘルスプロモーション、地域保健行政、地域保健・地域医療、地域福祉、老人保健、精神保健、医療管理法制の分野を合わせたものである。

「地域保健・福祉」の領域の中で、それぞれがどの位を占めているか示したのが図2である。その中で最も多いのが老人保健であった。加齢によ

表1 日本公衆衛生雑誌 第47巻～第52巻採択論文の種類と件数

	第47巻	第48巻	第49巻	第50巻	第51巻	第52巻	計
論壇	6	2	6	7	1	0	22
総説	1	3	5	5	2	3	19
原著	46	41	44	35	41	38	245
短報	0	2	1	2	4	3	12
公衆衛生活動報告	5	2	16	7	7	7	44
資料	26	26	32	29	24	25	162
会員の声	5	5	3	1	4	1	19
特別論文	0	0	0	1	0	0	1

図1 掲載論文の分野領域別推移

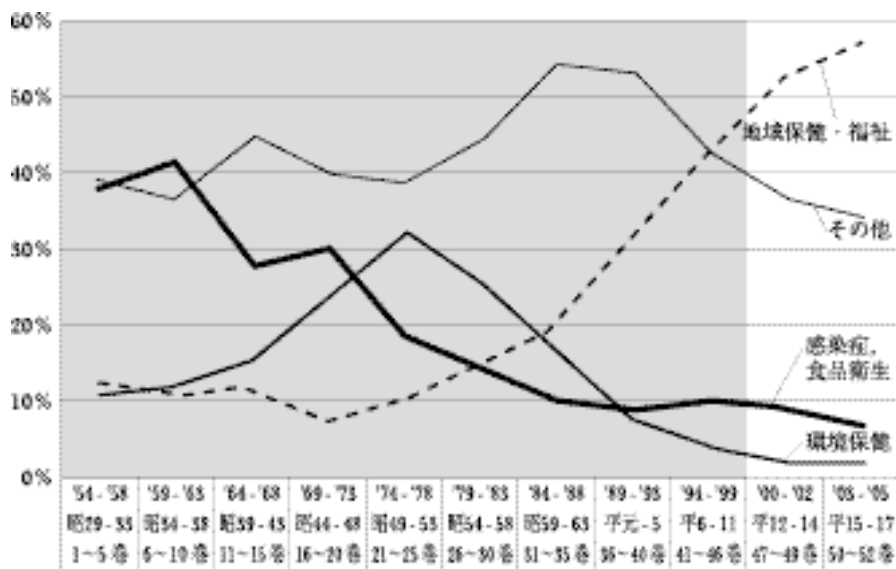
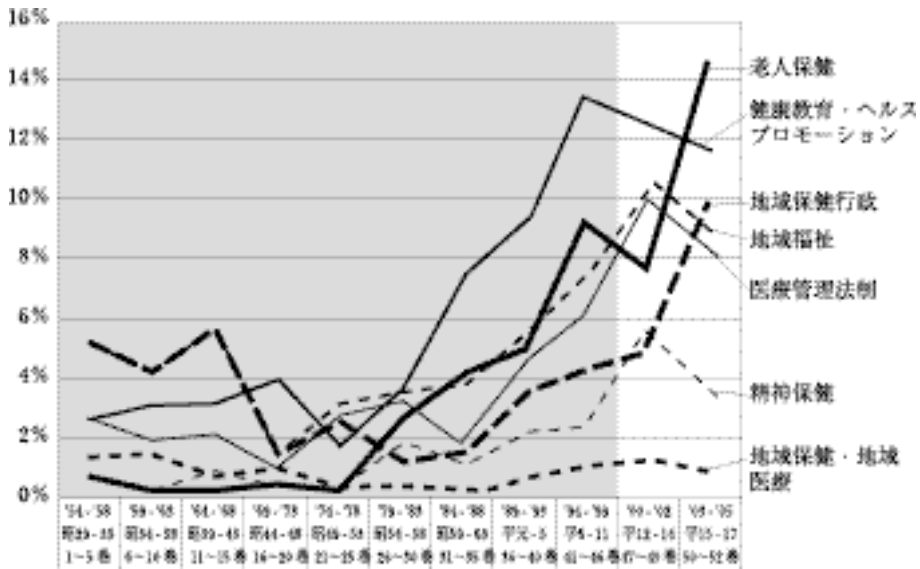


図2 「地域保健・福祉」内訳推移



るADL変化の研究を引き継ぐ形で、ねたきり、在宅高齢者、自立支援などに関する優れた研究が数多く発表されている。次いで多いのが健康教育・ヘルスプロモーション分野で、詳細はインターネットに譲るが、喫煙対策が最も多く、健診関連、保健医療意識、その他の健康教育・健康増進に関する論文が増えている。次に多い分野は、地域保健行政で過去6年間では保健福祉行政の評価に関するものが特徴的であった。続いて地域福祉では、在宅ケアに関する論文が激増していた。医療管理法制の分野は、医療政策、医療経済、保健従事者教育、保健従事者管理、病院経営管理の順序で増加してきている。精神保健の分野が増加しているのはストレス社会を反映しており、地域保健・地域医療としては在宅医療、訪問看護が多く、これらを包括して分析した素晴らしい論文もみられた。また過去6年間、質的研究を用いた論文の投稿も出始めており、公衆衛生的意義について編集委員会で討議した後、採否を決定している。

IV 日本公衆衛生雑誌創刊50年事業

平成15年1月号巻頭に「日本公衆衛生雑誌創刊50年を迎えて」を編集委員長および副編集委員長の豊嶋英明教授とともに執筆させて頂く栄誉に浴した。続いて編集担当理事 小林廉毅教授、金川克子教授および伊達ちぐさ教授による「日本公衆

衛生学会と日本公衆衛生雑誌の沿革」と「学会のあゆみ(年表)」、そして3月号には「日本公衆衛生雑誌(第1巻～第49巻)掲載論文の時代的変遷」が掲載された。

同年7月号(第50巻7号)には歴代編集委員長による寄稿をいただき、最近のお写真とともに掲載した。各先生から担当された時代の重要な事柄だけでなく、本誌に対する発展的御意見を頂戴できた。

記念事業として2回に亘る座談会、「地域保健福祉における本学会誌の役割」(第50巻9号)および「疫学研究と倫理」(第50巻11号)がなされた。出席下さった先生方はなるべく学会員を代表できるように職種、年齢、役職、地域を考慮した。このことがバランスの取れた討論につながった。

V 英文誌の創刊

編集委員会の発議に基づき理事会の議を経て、英文誌を年に1号発刊することが平成16(2004)年1月に決定した。これを受けて投稿を促す公告を2月号で行った。16編の論文が投稿され、初回ということで編集委員を中心に査読を行い、平成16(2004)年11月に日本公衆衛生雑誌初の英文号を発刊した。編集委員の負担は大きかったが、学会の発展に欠かせないと判断から、平成17(2004)年11月には2回目の英文号が発刊された。

2回目は、前年を上回る26編の論文投稿があり、11編が採択された。日本は世界一の長寿国でありながら、医療費はGNP比8.58%（平成14年度）と先進諸国の中で低いことから、国際的に日本の公衆衛生学は注目されている。英文論文数の増加に期待している。

VI これからの発展を期待して

日本公衆衛生雑誌は、時代の先端を切り開き、新しい学問の普及に務めてきた。今後の本誌の発展は、投稿者の層を厚くすることにある。採用、不採用を恐れず投稿されることを期待したい。今後の発展のために二つほど所感を述べたい。

一つは、個人情報保護の観点から疫学研究的倫理に関するガイドラインを遵守することがますます求められている。ぜひ、日本公衆衛生雑誌創刊50年記念事業の一つとして行なわれた座談会「疫

学研究と倫理」（第50巻11号）を一読願いたい。今までの研究は、研究者個人の発想にもとづいて、困難を解決しながら行なわれてきた。しかし、これからの公衆衛生学研究は、大学・研究機関・行政などが地域社会やNGOなどと連携しながら、社会が求めている保健・医療・福祉に関わる研究を十分に討議した上で実施することが求められている。

2つ目は、団塊の世代ががん年齢に突入し、年間60万人以上の新規患者が出るといわれている。がん及びがん対策は、これからの大きな社会問題である。胃がん治療の医療経済に関わる優れた論文などがすでにあるが、もっと私どもはがんの問題に公衆衛生学の立場から取り組むべきと考えられる。

終わりに、労をともにした編集担当理事、副編集委員長、編集委員各先生に謝意を重ねて表したい。